

シノプシス

タイトル

"The Daily Hazards of a Middle Eastern Wife"

「ザ・デイリーハザード・オブ・ア・ミドルイースタン・ワイフ

~中東の奥さんの大変な事情」

出版社・刊行年

Createspace (2015/6/25)

ペーパーバック 150 ページ

ISBN-10: 1514103494

ISBN-13: 978-1514103494

著者紹介

ソアード・ナスル(Soad Nasr)

エジプト生まれ。

子供のころは NASA の宇宙飛行士になるのが夢だった。現在は、エジプト人の夫と娘とともに妻と母として時間を楽しむ毎日である。

本書では、自らの体験をもとにアラブ社会での結婚にまつわる興味深い事実をユーモアたっぷりに語っている。

"The Daily Hazards of a Middle Eastern Wife"はアマゾンのカスタマーレビューで5星中4.9星を獲得。洞察力に優れた面白い本だと高い評価を得ている。

内容要点

イスラム教徒の結婚の慣習は独特で、イスラム教徒以外の人たちにとってはベールに包まれたものがある。イスラムの世界では結婚は一種の「契約」である。自らもエジプト系アラブ人妻である著者が、中東の奥さんたちが日常的に直面する問題について、ともすれば重い題材になりやすい題材をユーモアを織り交ぜ面白おかしく

描いている。知られざるイスラムの世界を垣間見ることができる。

目次

序文

はじめに

中東諸国における婚姻成立までの基本プロセス

理想の相手探し

婚約

婚姻の儀式

ヘナ・ナイト

結婚式

結婚式の夜

ハネムーン

結婚にかかる費用

人生の一大イベントが終わった後

夫

家族

妊娠

出産

子供

決別

結婚の次に待っているもの

邪眼(Evil Eye)

ドレスコード

政治情勢

噂

イスラム過激派の脅威

キリスト教徒

未婚女性

離婚女性

未亡人

その他のカテゴリーの妻たち

中東に住む駐在妻

まとめ

各章のあらすじ

中東諸国における婚姻成立までの基本プロセス

結婚の第一ステップは相手探しである。アラブの世界では、最初の出会いは、いわゆる「お見合い」、予めお膳立てされるケースが一般的だ。お見合いが終わり男女双方の合意が得られれば、将来夫となる男性が正式に相手の家族に結婚を申し込む日が決まる。

婚約が成立すると次は結婚だが、中東諸国では結婚は一種の「契約」とみなされる。金銭的な条件の取決めが始まる。新郎側はマフル(Mahr)と呼ばれる婚資を新婦に支払う。マフルは、金銭で支払われることが多いが、宝石、家具、土地などが贈られる場合もある。次に新郎側が愛の証として新婦に指輪などを贈るシャブカ(Shabka)と呼ばれる贈呈式がある。この贈り物も両家の合意が必要となる。その他、離婚した場合の条件などを詳細に取決める。

理想の相手探し

理想の結婚相手を見つけるには次の方法がある。

結婚についてよく知っている女性に仲介してもらおう。暇を持て余しているアラブ女性、特に年長のアラブ女性のネットワークは有益だ。

「結婚相談所」に登録する。女性が会費を支払い登録すると、希望条件にあった相手を検索し、デートの日付を設定してくれる。この場合、各デートにはお互いの母親が同席する。

また中東では、自分のイトコと結婚するケースも珍しくない。特に一家で事業を営む場合は、イトコ婚が選好される。いわゆる「内婚」の選好はいまだに根強い。

婚約

イスラム教では、結婚前、婚約期間中のいかなるスキンシップも禁じられている。婚約期間には、新郎新婦の品定めが行われる。両家それぞれの父親の職業、新郎の職業、月給、1日5回のお祈りをしているか、裕福な家系かなど、様々な関心が寄せられる。その結果、新郎のアパートが狭い、賃貸だから、妻に支払われる金額の条件が両家で合意に至らない、などのとっぴょうしもない理由で婚約が解消される場合がある。

婚約期間に新郎側は、新居を決め、家具、家電製品を揃え、新婦側は婚資を使って台所用品、食器、ベッドのシーツ、タオルなどの家財製品を揃える。その他新郎はダイヤモンドの婚約指輪を選ぶ。正式に新婦とその母親の承諾を得たらいよいよ購入となる。家具と宝石について言えば、カイマ(Qayma)と呼ばれる契約を結ぶカップルもいる。離婚した場合に女性が家具と宝石の一切をそのまま所有できることを取決めたものである。

婚姻の儀式

イスラムの世界では公式の婚姻の儀式をカタブエキタブ(Katb el kitab)と言う。立会人の前で結婚契約書に署名をする式である。シェイク(sheikh)またはイマーム(imam)と呼ばれる立会人が同席する。この結婚契約書には新郎新婦の権利と責任が定められている。

但し、この婚姻の儀式が終わったとしても、新郎新婦は、結婚式が終わり祝宴が終わるまでは正式な夫婦と認められない。

ヘナ・ナイト

新婦は、結婚式の数日前に「ヘナ・ナイト」を楽しむ。このヘナ・ナイトは西洋のバacheloretteパーティーに当たり、新婦の独身最後の夜を楽しむ宴だ。ヘナとい

う植物を使ってボディペイント、特に手に見事な美しい模様を施し、食事や踊りを楽しむ伝統的な宴である。

結婚式

中東の結婚式は、ホテルの宴会場で行われるのが一般的である。

結婚式では、新婦が父親(または親戚の男性)と一緒に登場し、新郎に新婦を引き渡すと、ザッファ(Zaffa)と呼ばれるアラブ式の音楽が始まる。ザッファが始まると招待客が会場に入場してくる。新郎新婦は、中央の高いところに設置された椅子席に座る。祝宴は、新郎新婦のファーストダンスから始まり、花嫁によるブーケトスがあり、料理が給仕される。ビュッフェスタイルの場合が多いが、子羊を丸ごと調理した料理が出されるのも一般的である。イスラム系の祝宴では、アルコール飲料は給仕されない。

中東の中でも結婚式のスタイルは異なる。例えばアラブ首長国連邦は、男性と女性は別々の異なる場所で結婚式を行うのが一般的だ。

結婚式の夜

結婚式の夜は、新郎新婦だけでなく、両家の両親や親族が最も神経を使う日だ。イスラムでは、婚前の性的交渉は男女とも禁じられている。特に女性に結婚前に性的交渉があった場合は、非常に大きな問題となる。

新婦が処女であれば親のメンツを保ち、新婦の評判を上げる。逆に婚前の性交渉が暴かれた場合には、親の顔に泥を塗ることになる。その結果、「一族の恥」として名誉殺人(Honor killing)と呼ばれる慣習が実行される場合もある。

ハネムーン

西洋の慣習と同じく、中東のカップルも結婚式が終わるとハネムーンに出発する。中・上層階級の家系は海外をハネムーン先に選ぶことも多い。ハネムーンに出かけないカップルは、結婚式の後は新居で誰にも邪魔されない1週間を過ごす。結婚7日目には、親族や友人の訪問が始まる。または新郎の母親が初夜の次の日(サバーヒヤ:Sabaheya と言う)にチェックにやってくるという慣習があるところもある。

結婚にかかる費用

中東諸国では、結婚に膨大な費用がかかる。新郎側は、新婦に支払う婚資やシャブカから始まり、新居、家具、家電用品、内装工事、結婚式、ハネムーンなどの費用を負担しなければならない。両親は、子供が生まれたときから結婚資金を蓄え始めるのが一般的になっている。

人生の一大イベントが終わった後

結婚式が終わりカップルがハネムーンから戻ると、親族や友人たちがお祝いに新居を訪れる。新婦は、美しく装い、新居も完璧にしておかなければならない。さもなければ、旦那に大事にされていない、十分な婚資がもらえなかったなどと、影口をたたかれる。夫の両親が訪問したときは、3コースの手料理でもてなし、いい嫁をアピールしなければならない。

結婚の次は子供である。結婚して1年以内に妊娠しないと、不妊症だと噂が立つ。3か月で妊娠できなかつたら、専門医を訪れるのが一般的だ。

夫

アラブ人の夫は過保護だが、その分、世話をすべて焼いてくれるので安心していられる。夫婦の関係がうまくいっていれば、何も心配することはない。金銭面の一切の責任を負うのは夫である。アラブの男性は信頼できる。但し、女性にコントロールされるのを嫌う。一方で、嫉妬深く、大変なヤキモチ焼きであるのも特徴だ。

またアラブ男性はとにかく食べることが好きだ。結婚したら嫁は料理の腕を磨き、夫の胃袋を満たすことが重要である。

家族

アラブ男性と結婚したら、夫と結婚しただけでなく、その一族と結婚したと思った方がよい。特にエジプトでは、遠縁の親戚を含む一家全員がひとつのパッケージとして結婚についてくる。

また新婦の家族は、結婚の金銭的な契約の段階になると、娘に磨きをかけ「我が家の商品」の妥当な値段の交渉を開始する。お金が優先し、カップルの幸せは二の次になることも多い。若い世代のカップルは、経済的に自立しておらず、親の援助を受けなければ結婚できない。家族が金銭的なことに大きな関わりをもつのはそのためだ。

妊娠

周囲は、結婚の次は妊娠と思っている。子供はもう少ししてからと考えるカップルは、親族から要らぬことを言われると覚悟した方がよい。逆に子供がすぐほしいと言う新婦は、ストレスをためず、周囲の声に耳を傾けないことだ。とにかく焦らないことだ。

晴れて妊娠に成功したら、その日から「お姫様」のように大切に扱われる。胎児の性別は重要だ。女の子だとわかったら、周囲に女の子だと言った方がよい。そうすることで邪眼を取払うと言われている。男の子だとわかったら、最後までできる限り隠し通すことだ。イスラム教は、子供の性別に関係なく、親は子供を平等に扱わなければならないと明示的に説いているにもかかわらず、中東諸国には男尊女卑の考え方が根強く残っている。よって晴れて男の子を出産した嫁は、いい嫁となる。

出産

陣痛が始まると、親族が集まり安産を願って祈りを捧げる。

エジプトでは、妊婦に問題がないにも関わらず帝王切開を進められるケースが多い。自然分娩より高い額を請求できるからだ。また医師にしてみれば、自然分娩より短時間で済むからである。

子供

中東の習慣では、妻は産後、自分の足で歩けるようになるまでは、実家に戻るのが一般的だ。母乳の出がよく赤ちゃんに十分な母乳を与えられれば、赤ちゃんは大きく育つ。太った赤ちゃんは富と繁栄の象徴と言われる。

また出産したばかりの母親は、邪眼のターゲットになる傾向があるので、必要以外の外出は避けた方がよい。

無事に赤ちゃんが誕生すると、アキカ(Aqeeqah)と呼ばれる儀式が行われる。通常は羊やヤギなどをさばき親戚や友人にもてなす。動物の命を犠牲にし、赤ちゃんに危害を加える邪悪なものを取り除くという意味をもつ伝統的な儀式である。また男の子が誕生した場合は、割礼の儀式が行われるのも一般的である。

決別

中東では、結婚は黄金の独身時代との決別を意味する。女性が仕事、夢、長年のキャリアなどをあきらめなければならない理由には、夫の理解が得られない、結婚して経済的な安定が得られたから、出産、社会からの圧力、ストレスなどが考えられる。もうひとつの別れは独身時代の体重だ。女性は、結婚すると体重が増加する傾向にある。同時にビーティケアにも無頓着になる。友人との時間もなくなる。

結婚の次に待っているもの

中東では家族は神聖なものとされ、誰でもいつかは家族を持ちたいと考える。家族の核となるのが妻と母親である。

女性の大きな役割は、幸せな家庭を作ることだ。常に家をきれいな状態に保ち、ヘルシーで美味しい料理を作り家族が満足する量を用意しなければならない。子供がいれば、子供の学業が中心となる。エジプトでは、子供を大学にやり医者かエンジニアにするのが親の大きな目標だ。医者かエンジニアにするのに成功したら、次は結婚である。そして結婚した9か月か1年後には初孫を期待する。そして次の孫へと続いていく。これが中東のアラブ女性の典型的な人生と言える。

邪眼(Evil Eye)

アラブの世界ではあらゆるものが邪眼とつながっていると考えられている。邪眼とは、悪意の目。古代より悪意を持った目で人を睨みつけることによって呪いを掛ける魔力があるという言い伝えがある。

結婚式は、邪眼のターゲットになりやすい。羨望の目が注がれるからだ。結婚式場にバフル(Bokhoor)と呼ばれるお香を焚くのは、邪眼を寄せ付けないという魔除けの意味がある。特に離婚者は要注意とされる。さらに妊娠中の女性で、胎児が男の子だとわかっている場合、邪眼を引き寄せると言われる。胎児が男の子の場合は、周囲にそのことを公表しない、または男の新生児に女の子の名前を付けたりピアスをして女の子だと思わせる慣習が残っているところもある。

ドレスコード

アラブ女性がすべて黒い服で肌を覆っているわけではない。主に7つのタイプのドレスコードがある。

ヨーロッパスタイルは、自由なスタイルで髪も足や腕の肌を隠していないタイプ。

- 2 番目のスタイルは、髪の毛は出しているが他のボディーは隠しているタイプ。
- 3 番目のスタイルは、ヒジャブ(Hijab)と呼ばれるスカーフで髪を隠し、ロングパンツ、ロングスカートやジャケットを着ているタイプ。
- 4 番目のスタイルは、同じくヒジャブを着用するが前髪を出しているタイプ。
- 5 番目のスタイルは、アバヤ(Abaya)と呼ばれる黒い服で髪の毛と全身を隠しているタイプ。
- 6 番目のスタイルは、ニカブ(Niqab)と呼ばれる目以外の顔と髪を隠すフェースベールを着用し、全身も隠すタイプ。
- 最後にブーカ(Burqa)と呼ばれる顔と全身をすっぽり隠すタイプ。目の部分はメッシュになっていることが多い。

政治情勢

中東はすべてが政治に絡んでいる。政治はアラブ人夫婦の結婚生活に大きく影響する。チュニジアから始まった「アラブの春」によって、中東では革命や変政が続いている。政治的な意見の違いで、離婚に至る夫婦もいる。

噂

アラブ人は噂を広めるのが得意だ。エジプトでは特に噂話是一种のエンターテイメントになっている。結婚を考える若い女性は、十分注意して悪い噂を避け、よい評判を維持することが重要だ。毎晩遅くまで遊んでいるようなら悪い噂が立つ。また車には男性と同乗してはならない。男女が同じ車に乗るのはタブーで、男女が一对一の状態になるのも避けなければならない。中東では、常に第三者(兄弟、姉妹など)が同席するのが一般的だ。

イスラム過激派の脅威

西洋人がイスラム教徒のテロリストについて悪い妄想を描くのも無理はない。重要なことは、西洋諸国のリーダーは中東情勢をよく理解し、イスラム教徒の全員がテロリストなわけではないと国民に伝えることだ。保守的なイスラム教徒とイスラム過激派とは、大きく異なることを知ることが大切である。

中東には3つのグループがある。イスラム原理主義者、進歩主義者と普通の生活を望む平均的な家族である。夫が同じイデオロギーを持っていれば問題はないが、夫

婦が宗教上異なる観念を持っていると問題だ。この場合、一方が改宗する、家庭内でもめる、またお互いの観念をお互いが尊重するのいずれかの状態になるだろう。

キリスト教徒

中東の人すべてがイスラム教なわけではない。中東に住むキリスト教徒のほとんどがエジプトに居住している。エジプト系キリスト教徒はコプト教徒と呼ばれ、ほとんどが正教徒だ。コプト教徒の結婚式に酒類が給仕されるのは珍しくない。

イスラム教徒の結婚の慣習の多くがコプト教徒の結婚に類似しているが、大きく違うのは、離婚の規定である。コプト教は保守的で離婚は許されず、再婚も認めていない。

未婚女性

中東では 25 歳までに結婚していない女性は、例え本人が独身を謳歌したいと思っ
ていても、社会からは軽視されたり厳しい目で見られる。西洋では、年齢を重ねキ
ャリアもある女性は自立しているというプラスのイメージがあるが、中東ではキャ
リアのある女性は恐れられる。中東女性は、キャリアよりまず結婚だ。女性は若く
ナイーブで、夫がいなければなにもできないようなタイプが好まれる。夫は、そん
な若い妻の方がコントロールしやすいからだ。

離婚女性

未婚女性が中東で生きていくのが難しいというのであれば、離婚女性はどうなるだ
ろうか。離婚理由のいかんを問わず、離婚女性はアラブ社会では恥ずべき落後者と
みなされる。仮に夫がアルコール中毒であっても浮気をして、常に落ち度は妻の
側にある。

離婚女性には、性交渉もあるということは明確で、そのため再婚も難しい。特に子
供がいる離婚女性の場合は、他の子供の経済的負担をするという人はそうそうそう
現れないので、非常に難しい。コーランでは再婚を禁じていないが実際は厳しいの
が現状である。

未亡人

葬儀が終わると、未亡人は実家に帰され、数か月はコミュニティーとの接触を避け孤独に過ごす。コーランには再婚を禁じる節はないが、夫が死亡してから3か月は再婚できない。イスラムの社会では、未亡人でも子供の有る無し、それも娘か息子かによっても状況は異なる。息子がいれば面倒を見てもらえるが、娘しかいない未亡人は、経済的な負担が大きくなる。未亡人に兄弟がいたり、父親が生存していれば、これらの男性保護者が面倒を見ることになる。田舎の地域では、一族の財産を守るため、義理の兄弟と結婚させられるケースもある。

その他のカテゴリーの妻たち

これまで述べた女性以外にもうひとつ「その他」に属する妻たちがいる。

一夫多妻は、中東ではよく知られた結婚のあり方で、夫は妻を4人まで持つことができる。但し、他の3人の妻の同意が必要となる。夫は4人の妻を同等に扱わなければならない。時間、金銭、ロマンスを同等に分け与えなければならない。金銭的に余裕がなければ4人の妻は持てない。一夫多妻は、裕福な湾岸アラブ諸国でより一般的である。

中東で暮らす駐在妻

駐在員の妻として中東に住むことになれば、せっかくだから現地の人と知り合いになりたいと思うだろうが、そこにはアラブの言葉の壁がある。中東に住む駐在妻は駐在妻と友達になるパターンが多い。但し、友達はできたとしても、駐在は駐在でしかなく、あくまでも部外者で、この国に属しているという感覚は持つことはできないだろう。それでも自国に戻ったときに、なんとなくしっくりこない人は多い。それは独特のアラブ諸国での駐在暮らしで自分が変わってしまったのかもしれない。

まとめ

イスラム教は、慈悲と親愛の情が結婚の礎となると教えている。アラブ人の結婚は、混乱が伴う。既婚女性と未婚女性、離婚の条件、子供の性別や人数、パーフェクトな花嫁の条件など、一風変わった考え方がある。

伝統は、人々を結びつけるもので、引き離すものではない。結婚する目的は単純なはずである。愛する二人が神聖な結婚生活を送るためにある。25歳までに結婚しなければならない、相手の家族の評判などは関係ないはずだ。引き継ぐべき伝統は

そのまま継承し、現在アラブ諸国が抱える問題は解決していかなければならない。例えば、法律によって、女性は名誉殺人(Honor killing)から守られるべきである。

ハザードという言葉も人によって定義が異なるだろう。夫が家事を手伝ってくれないのもハザードであり、夕食が用意できていなかったからといって妻に暴力を振るうのもハザードである。本書を通じ世界で共通するハザードに驚く読者も多くいるだろう。

分析・感想・評価

「中東」、「アラブ女性」、「イスラム教」という言葉を聞くと、読者はどんなことを連想するだろうか。これらの言葉を聞いただけで暗く怖いイメージを持つ方も少なくないのではないだろうか。イスラム教徒は「飲酒しない」「豚肉を食べない」「独特の服がある」ぐらいの知識はあっても、イスラムの世界はベールに包まれた部分が多く、私たちは実際によく知らないので、勝手にそんなイメージを抱いてしまいがちである。

エジプト生まれのイスラム教徒である著者は、これまで世界レベルで語られたことがない部分をユーモアを交え、わかりやすく解説している。また宗教や政治に関するデリケートな問題も実に率直にストレートに意見をぶつけている。著者自身も、いわゆる一種の見合い結婚で結婚し一人娘がいる。中東のさまざまな国で駐在妻としての経験も持つ。本書全体を通し、イスラム教徒でありながら、駐在経験を通じて培った客観的な視点でとらえた臨場感とユーモアセンス溢れる表現が光る。

イスラム教では、結婚は「契約」である。基本的に恋愛の自由が認められている日本では、理解しがたい概念ではないだろうか。最近では「婚活イベント」なども盛んで、カジュアルな「お見合い」が一般的になってきた日本ではあるが、読者は中東とのお見合いや恋愛事情の違いを比較しながら読み進めることができる。

また配偶者探しや結婚の習慣、イトコ婚、一夫多妻制、邪眼など、日本人の感覚では考えにくい習慣やイスラム教徒の中に潜在的に存在する概念が多く紹介されているが、著者のユーモアあふれる解説によって、読者は大いに興味を惹かれるだろう。名誉殺人やイスラム過激派など、脅威を感じる内容にも客観的にストレートに触れており、読者は好奇心を満たされるにだろう。

イスラム系の女性には7つのドレスコードがあり、イラスト入りでわかりやすく解説されている。イスラム教でもマレーシア、インドネシア、シンガポールなどの東南アジア系と中東系のドレスコードは異なる。また中東の中でも、サウジアラビア、エジプト、アラブ首長国連邦でも多少異なる。地域、宗派やトレンドによるものだろうと想像するが、その違いをもう少し詳しく知りたかったという感が残る。

本書はそれぞれカテゴリーに分けて解説されており、各章がそれぞれ完結で非常に明快なストーリーラインである。但し、読み終わってみて、タイトルである **Daily Hazards**(日常的なハザード)と各章との関連性が明確につかめなかった。著者は、最後の章で「ハザード」という言葉を使いこれに触れているが、人によってそのレベルは異なるとし、ハザードの判断は読者にゆだねられている。最後のまとめの章で「そういえばハザードってどのことだったろう?」と困惑する読者もいるかもしれない。

対象年齢は 10 代後半から大人。未婚女性、既婚女性を問わず、これまで国際レベルで語られなかったイスラムの知られざる世界に多くの人々が興味を引かれるだろう。シンプルな英語で読みやすく、イラストや写真がふんだんに使われており実際の様子がイメージしやすい。

翻訳をする際は、アラブ語が登場するのでその訳し方は研究を要する。また宗教のこと、政治的な背景をよく知る必要がある。イスラム教の聖典「コーラン」の節がいくつか登場する。これについても調査が必要になるだろう。

近年はドバイやサウジアラビアをはじめとする中東への関心が高まっている。その文化や宗教的背景と、そこで暮らす妻たちはどんな生活をしているのかに興味を持つ読者層を、ある程度確保できると思う。